

楽天翻訳家、 転落にすくむ…



東江一紀

例えば、スキー場のリフトね。大学一年の冬に、はじめてあれに乗ったとき、わたし、十九歳にして人生終わりかと思った。あの背もたれのない椅子に座って、地上五メートルほどの高さまでのぼった瞬間、ここで支えの棒から手を放して、ちょっと上体を傾けるだけで、奈落の底へ落ちていけるのだと気づき、そうになると、やたらに想像力が働きたって、とても平静を保ってなどいられなくなった。頂上に着くまで、なりふり構わず、満身の力を込めて棒にしがみついてましたよ。

それが生まれて二度めのスキーだったが、すっかりおじけづいたわたしは、北海道に七年間住みながら、その後まったくスキーには行かなかった。かわりに、オールシーズン・オールウェザー・スポーツであるパチンコにのめり込み、思えばそこから転落の人生が始まった。物理的な落下を恐れるあまり、精神におっこちてしまったわけだな。

わたし、ヴァーティカルフォビアである。垂直恐怖症。って、普通は言わないか。要するに、高所恐怖症なんです。英語では、アクロフォビアと言うらしい。

高いところと言ったって、富士山の山頂に登るのは、たいして怖いとは思わない。きつから登らないだけで……。家賃の高い家に

住むのも、たいして苦痛には感じない。収入が追いつかないから住まないだけで……。

恐怖を覚えるのは、純然たる落差、というか、その落差の持つ位置エネルギーであって、つまり、一定以上の上下幅を持つ垂直な空間を垂直に落下していく潜在的な可能性に対して、わたしは怯えるのである。

歩道橋も怖い。一般的に、歩道橋の手すりは低すぎる。あんなもの、その気になれば、ひよいと越えてしまえるではないか。そして、越えてしまったらもう、取り返しがつかないんだ。よくみんな平気で渡れるよなあ。

遠回りでも、横断歩道があれば、なるべく地上を歩くようにしている。やむなく歩道橋を渡る場合は、まず深呼吸をして動悸を静め、

階段をゆっくりのぼって行って、橋の中央を前かがみに速足で歩く。そのあいだ、呼吸はしない。向こう端までたどり着いたところで、ふうっと息をつき、何ごともなかったかのよう階段を下りるんです。

これは疲れる。

鬼門中の鬼門が、飯田橋の大歩道橋群だ。

ひとつひとつの橋が長いうえに、最低でもふたつか三つの橋を歩かないと向こうに着かない。あそこを渡るのは、決死の大事業ですね。あの歩道橋群の向こうにあるTJSS元社は、わたしにとって、日本でいちばん遠い出版社だと言っているだろう。Dン・ウィンズロウの翻訳が遅れがちなのも、その辺に原因があるんじゃないだろうか、と、わたしはひそかに推測している。

そんなわたしが、つい最近、『ヴァーティカル・ラン』などという小説を訳してしまった。怖かったですよ。ニューヨークにある五十階建ての高層ビルのなかを、主人公がヴァーティカルに走りまわること。

まず、四十五階のあるオフィスが出てくる。某優良企業の会長室です。ご多分に漏れず、通りに面した側の壁が、床から天井まで全面ガラス張りになっている。これだけで、わたし、わなわなと脚が震えてくる。実際にそんな部屋に入ったら、へたり込んで、机の脚か

キャビネットのへりをぎゅっとつかんでしまおうだろうなあ。窓のそばへなんか、ぜえ〜ったいに近寄らないぞ。

だって、この一枚ガラスというやつ、体当たりしたら割れてしまいうんならもの。と思っていたら、なんと、オフィスの主である会長さんが、ガラスに向かって椅子を投げつけ、大きな割れ目をこしらえて、そこから投身自殺する。引き留めるまもあらばこそ。

四十五階下の路面に達するまで、約六秒。訳しながら、わたし、パソコンの画面から目をそむけちゃいました。そうやって、場面が切り替わるのをじっと待っていたのだが、わたしはその先を訳さないかぎり、会長さんは永遠に落下中のままなのだった。

しかし、人生最後の六秒間の過ごし方としては、おおよそ最悪ではなかるうか。だからといって、この六秒間を人生の中途に持つてくるのは、ちとむずかしい。なにせ四十五階ですからね。打ちどころがよくて助かったなどということは考えにくい。

このあとも、物語の舞台は垂直に上下し、後半でついに、ヴァーティカルに達する。そう、屋上にのぼっちゃうの。やめてほしかったなあ、これだけは。五十階建てのビルの、五十階のさらに上ですよ。

昔、自分が住んでいた四階建ての下駄履きア

パートの屋上にのぼったことがあるが、あれでも、わたしにはじゅうぶんに怖くて、へりの近くへはともに行けなかった。

というわけで、そこからの数ページは、わたし、目をつぶって訳しました。いや、目をつぶると、かえって情景が生々しく浮かんでくるので、薄目をあけ、息を殺し、なるべく場面を想像しないようにしながら、うつむきかげんにひたすら突き進んだ。そう、歩道橋を渡るのと同じ要領ですね。

そうやって、寿命の縮むような思いで訳し終え、一カ月後、ゲラで読んだら、なんとまあ、速く読めるぶんだけ迫力が増して、失神しそうなくらい怖かった。

垂直恐怖症に悩む全国七千万人(推定)の皆さんには、この本、けっして読まないように警告しておく。といっても、本誌の購読者は、そのうちせいぜい五百万人ぐらいだろうが。

いえ、買うのは構わないですよ。買うだけなら、ちつとも怖くない。書店で見かけたら、手に取って、立ち読みなどせず、レジへ直行してください。そして、家に帰ったら、嚴重にひもを掛けて、頑丈な木の箱にしまい、ふたに何本か釘を打っておく。

ついでにお札などを貼れば、それで万全。あなたの安寧を脅かすものはありません。

ふうーっ。